

車座 2019

認定NPO法人アイキャン(ICAN)

海外事業部 吉田 文氏

1984年生まれ 岐阜県出身

大学卒業後、留学関連企業で営業職を経て、2009年 ICAN 日本事務局に入職。
これまでに路上生活をする子どもたちや紛争地の人々との活動、フェアトレード事業等を担当。

認定NPO法人アイキャン(ICAN)とは

フィリピン、イエメン、ジブチを事業地として、紛争地や路上、災害被災地等に暮らす人々・子どもたちとともに、教育、保健衛生、収入向上事業を行うNGO団体。「1人1人ができること(ICAN)を持ち合わせて大きな変化を生み出す」を合言葉としている。

「ねずみみたいなもの」と自嘲する子どもたち

世界で、飢餓で亡くなる人の数は1分間に推定17人。気候変動や紛争、景気後退を原因として年々増加傾向にある。路上生活を送る子供は世界に1億~1億5千万人、出生登録されていない子供たちを数えればその数はさらに増えるだろう。NPO/NGOはこういった問題に政府や国際機関と異なる「民間の立場」から取り組んでいる。

今回、吉田さんがICANに入職してからの活動の中で、特にフィリピンのストリートチルドレン支援についてお話いただいた。

フィリピンはアジアの中でも経済発展が著しいが、都市部を一步離れるとバラック小屋が立ち並ぶ。ストリートチルドレンは推定25万人とされているが、政府も正式な数字を把握できていない。

路上生活を送る子供たちは、慢性的な栄養失調、路上でのリンチや大人からの暴力に晒されており、免疫力の低さから小さな怪我でも死に至る危険をはらんでいる。絶望から逃れるために、安価なシンナーに手を出し薬物依存状態になる子供も少なくない。出生登録がされていない子供たちは、国家、地域、家族、いずれからも福祉を受けることができず、ギャングや群れを作り暮らしている。

吉田さんが中でも忘れられないと語るのが「僕はいつ死んだっていいんだ、僕はねずみみたいなものなんだよ」と自嘲する子供の言葉だ。

ICANは子供たちを救うため、行政への介入とともに、親への介入、子供たちの保護を行っている。村役場や地域の教会などに場所を借り、地域住民や賛同者の協力を得ながら路上教育を行い、子供たちが自発的にもう一度学校に通いたいと望んだ場合には、学校や親との交渉を行う。

かつては路上で荒んだ眼をしていた子供たちが、教育を受け施設に入ることによって自信に満ち溢れた表情を見せてくれるようになり、少しずつではあるが変化を感じていると吉田さんは言う。「いつ死んでもいい」と言う子ども達に「自分が死ぬと悲しむ人たちがいる」「自分に生きる意味がある」と感じさせることが、子供たちの「生きる力」に繋がっていると吉田さんは考えている。

課題は山積みの世界、でも世界はみんなの力でできている

参加者から寄せられた『世界の子供たちのために、私には何ができますか』という質問に、吉田さんは「難しい質問ですね」と答えた。芸能人のチャリティや、政治家の施策、大学の研究でも、貧困も紛争もなくすることはできない。誰もが答えを持っていない問題だ。前向きな変化を感じる一方で、それでも世界でみると課題は山積み。そんな状況に無力感を感じることもあるという。

しかし、貧困や飢餓、紛争が自分たちの小さな選択の積み重ねの結果として存在しているように、「みんなの力」にはそれを変えることもできるはずだと吉田さんは続けた。

自動運転が実現したように、紛争や貧困のない世界実現へ

グローバル化が進むということは、他国との相互依存関係を築くということである。日本の食料自給率は40%を切っており、けして自立した国家ではない。他国の安定・繁栄に貢献することは、結果的に日本の安定につながっていく。単純に日本、海外で切り離せないのが現代の状況と言えるだろう。国際NGOの活動は海外の幸せを願うだけでなく、自分たちの幸せ、未来を願う活動でもあると吉田さんは考えている。

吉田さんは最後にデンソーグループ社員へのメッセージとして「子供の頃、科学雑誌に書かれていた自動運転の車も、夢物語ではなく現実になっている。夢を現実にしていく力があることは希望だと思う。だから、自分に何ができるかから考え始めてください。」と結んだ。

まずは現状を知ること、それが、夢物語のような大きな夢の実現に繋がる第一歩となるだろう。

【ICAN HP】

<http://www.ican.or.jp/index.html>

【Facebook アーカイブ動画公開中】

<https://www.facebook.com/DensoHeartyfulMatsuri/videos/vl.728119470945426/358662021702385/?type=1>